

1972

1. はじめに

下位文化 (subculture) ということばは、いろいろな使われ方をしているが、ここでは反逆文化 (contraculture) という意味でこの語を使う。つまり、社会の中のある地位を占める人々に対して、社会からなされる主要な役割期待に反した、あるいはそれとは葛藤をこす規範や価値観あるいは行動様式 (生活目標などを含む) が、その地位を占める人々によって共有されている時、その規範、価値観、行動様式を下位文化とよ¹⁾。このように下位文化を定義した時、学校という社会の中で生徒という地位を占める子どもたちの中に、下位文化は存在するのであろう。もし存在するとすれば、それは具体的にどういう社会文化的条件によって動機づけられているのであろうか。また、それを学校はどのように統制しているものであろうか。

2. 役割期待への反応

まず、社会の役割期待がある個人が受け入れるよう動機づけられるのはどのような時かを考えよう。人は、欲求の充足を求めて、社会関係の中に入っていく。そして、彼のはらう努力にみあうような報酬（欲求充足）が、その社会関係から得られる時、その個人はその社会関係が彼に期待する役割を受け入れるのである。彼のはらう努力と報酬との均衡がとれている限りにおいて、彼は、彼への役割期待に反する行動をとるよう動機づけられることはない。逆にいえば、役割期待に反するような行動をとるのは、彼のはらう努力と受ける報酬の均衡がとれていないからである。

努力と報酬の均衡がとれていないと彼が感じるのには、ふたつの場合が

ある。一つは、努力にみあった報酬の量が不足であると感ずる場合であり、もう一つは、報酬の質に不満を感ずる場合である。前者は説明を要しないであろう。後者は、たとえば、彼が求めていたものが愛であるのに、与えられたものが地位であったような場合である。このように、個人の期待する報酬と、社会から与えられる報酬がくいちがうのは、主として、社会の中の勢力関係によって、報酬の分配が上位者に優れており、上位者の私的目標が社会全体の公的な目標となっているからである。

3. アチーブメント重視

次に、社会や学校のあり方との関係で、生徒における努力と報酬の関係について考えてみよう。現代の日本は、西欧やアメリカと同様、教育が社会への人材供給の機能をはたしている。したがって、学校の主要な目標は、アカデミックアチーブメントを高めることにおかれている。アチーブメントの重視は、もとは中産階層の価値観であり、すべての人々に普遍的なものであるわけではない。しかし、社会の主要な活動の場——特に学校という場——は中産階層の人々が支配しており、すべての子どもがそれに同調するように強いられている。この価値観の中には、良い成績をとること、高いアスピレーションをもつこと、長期的な目標のために目の欲望の充足を延期できる能力を持つことなどが含まれている²⁾。しかし、社会階層が異なれば社会の型も異なり、他の階層の子どもは、目標の設定に関して不利な状態におかれている。

したがって、現在の学校に支配的な価値観とは共通のものを持たない社会階層の出身の生徒の中から、教育目標（報酬の質）に関して（もちろん、それはらう努力との関係で）、反発がおり、役割期待に反した行動がとられるようになると考えられる。しかし、事態はそれほど簡単ではない。というのは、社会に支配的な価値観をすべての人が少なくとも一部内面化しており、また子どもは、親の出身階層だけでなく、将来彼が属することになるであろう社会的地位を想定して、行動を選択するという予期的社会

化 (anticipatory socialization) の側面もあるからである。したがって、出身階層だけでなく、現在の学校に支配的なアチーブメント重視の規範に同調するかどうか (それは、成績、アスピレーション、欲望の充足を延期できる能力等を指標としてはかることができる) によって、個々の生徒が学校の役割期待に答えるかどうかが決定される、と考えるのが妥当であろう。(以上は、報酬の質との関係で検討をすすめたものであるが、報酬の量についても事情は同じである。)

努力と報酬との均衡がとれないで、役割期待に従わないというのは、個々の生徒の動機づけの側面の問題である。その動機づけが基点となりどのようにして反抗の規範ができ、下位文化が形成されるかというプロセスに関しては、コーヘンの理論に詳しい³⁾。ここでは、その問題に深入りしないで、下位文化の形成、共有によって、役割期待への反発がさらに強まることを強調しておく。

以下、いくつかの実証研究を位置づける。

松本良夫は、都内の中学3年生を対象に、生徒の就学行動を規定する要因を調べている。そして、学校や教師の役割期待に反する反抗的就学行動のあらわれ方が、出身階層に規定されつつも、それ以上に、教育上の進路志望によって規定されることの多いことを示している。たとえば、学校をさぼった経験がある生徒の割合についてみると、出身階層別では、ホワイトカラー（3.6%）、旧中産階層（4.0%）、ブルーカラー（7.6%）とあまり差はなく、教育上の進路志望別にみると、大学まで（2.9%）、高校まで（4.9%）、中学まで（20.0%）と差が大きくなっている。つまり、出身階層よりも、将来の社会的地位に志向したアスピレーションの高さによって、生徒の行動が規定されていたのである⁴⁹。

筆者が行なった、親の階層がほとんど同質の私立高校の調査では、成績と生徒の下位文化（学校や教師への反発、学校の勉強に意味がないと考える

傾向)との間には、密接な関係があった。つまり、成績の低い生徒ほど、学校の役割期待に批判的であったのである⁵⁾。

成績やアスピレーションの差によって、それが高いものは高いもの同士、低いものは低いもの同士を集めるという教育組織（いわゆる能力別編成）を採用すれば、役割期待への反応の仕方や下位文化の共有が逆に規定要因になって成績やアスピレーションの差は、ますます大きくなることは想像にかたくなくない。この点に関しては、ハーグリーブスのすぐれた実証研究がある。彼は、非熱練労働者の多いイングランド北部都市にあるセカンダリーモダンスクールの生徒を調べて、2年生ではまだはっきりしていなかった下位文化（ハーグリーブスはそれを非行下位文化とよんでいる）が、4年生のランクの低い学級にはっきりあらわれるようになっていたことを発見している。すなわち、この学校では、学期末の試験の成績をもとにした4段階の能力別編成がとられており、4年生になると生徒の動きも固定していた。そしてランクの高い学級の生徒は、学校や教師の規範に同調する傾向が強かったのに対し、ランクの低い学級では、学校や教師の規範に対して否定的な下位文化が形成されていたのである（図1）。そのメカニズムについて、ハーグリーブスは、次のように述べている。「上位の学級のメンバーは“成功者”であり、彼らの努力や価値は、獲得する地位によって報われる。下位の学級の少年は“落伍者”である。彼らは学校と社会の両方から地位

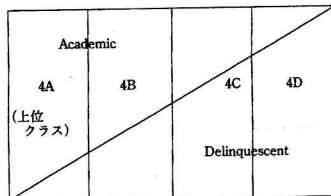


図1 下位文化と学級
(David H. Hargreaves p.163)

を奪われている。彼らの努力はほとんど報いられたためしが無い。彼らは社会や教師の価値を拒否することによって、適応の問題を解決する。それは、同輩集団の価値に代償を求めることであり、社会や教師の価値を裏切えたものへの忠誠によって地位を獲得する。⁶⁾

日本の場合は、高校において、国立大学進学率をもとに分類してみると、底辺が大きく尖度の鋭いピラミッド型をなす、学校差があるという⁷⁾。生徒の生活態度や価値観が学校差と対応してどのようなあらわれ方をするかに関しては、野村哲也らの調査がある⁸⁾。日本の高校では、少数のエリート校の生徒のために、多くの下位ランクの生徒たちが、強い心理的圧迫を受けているのである。

アメリカにおいては、ウィルソンの研究がある。彼は7つの公立高校を3つのランクに分けて、それぞれの学校に入った生徒が、学校の風土からどのような影響を受けているかを調べている。その結果、知能が低いあるいは、ブルーカラー出身であっても、ランクの高い学校にいけば、大学進学へのアスピレーションは高まるし、逆に知能が高いあるいはホワイトカラー出身であっても、ランクの低学校にいけば、大学進学へのアスピレーションが弱まる事実のあることを、明らかにしている⁹⁾。

5. 学校の対処の仕方

次に、学校が、努力と報酬の不均衡に苦しむ生徒たちに対して、どのような対処の仕方をしているかを検討しよう。この不均衡状態を放置しておけば、反逆する下位文化が蔓延して、学校の存続が危うくされる。

まず、生徒の欲求にあわせて、教育目標（報酬の質）を修正するという方法がある¹⁰⁾。しかし、これは社会や学校の構造が変わらない限り、とても難しい。もう一つは、よくとられる方法で、努力と報酬との不均衡から生じた攻撃性（怒り）を無害な形で表出させる方法である。これには隔離が必要である。つまり、時間や場所を限定して、あつや多少とも過激的な行動が許容されるのである¹¹⁾。学校における生徒活動がそのよい例である。

アメリカの社会にはアカデミックアチャーブメント文化（＝硬活動）および志向を尊重する文化風土があるのに対して¹⁷⁾、日本ではイギリスと同様、アチャーブメントの重視は一方向的であり、それに対して生徒活動やあそびは意識的あるいは精神的な意味が持たえないからである。したがって、日

本における生徒の低位文化の研究は、その置かれた社会文化的条件を考えると、アメリカのコーマンやゴールドンの研究ばかりでなく、イギリスのハーグリーブスの研究あるいはコーヘンらの非行研究から受ける影響が大きいものと思われる。

である¹³⁾。また、コーマンは、非アカデミックな価値風土の学校ほど、
可能な高い生徒がよい成績をとることの少ないことを示して、アメリカの
高校校がアカデミックな学問に志向する生徒を意気消沈させ、その才能をダ
メにしてしまう傾向があることを警告している¹⁴⁾。ゴールドマンの高校校
にも、運動競技などがある学校の制度の中に入り入れることからくるディ
レクティブな傾向があり、教師の生徒に対する評価を「制度的な価値や専門
教師との関係性を密接にし、教師の生徒に対する評価を「制度的な価値や専門
教師との関係性に基づく標準」から逸脱する傾向を生じさせていたの
である¹⁵⁾。

しかし、生徒活動による統制が、まったく失敗しているわけではない。
コールマンの研究には、「指導的集団」のメンバーが、あそびに志向しつつ
一般の生徒より成績が良かったことが示されている¹⁶⁾。これは、生徒

ラーは、生徒活動について、次のように述べている。「生徒活動は、学生生活における教師の統制力を助長してくれる点で大いに価値がある。最も

しかし、生徒活動が学校の定めた目標を越える時がある。その典型例として、アメリカの高校の研究にみることもできる。ゴッマンやゴードンのアメリカの高校の調査では、生徒の行動パターンは10の高校の生徒を対象にした大規模な調査では、生徒の行動パターンは、非ガチメックな方向に志向していることが示されている。たとえば、「指導的リーダー」(Leading Crowd)のメンバーになるためには、「成績がよい」「指導的才能も、男子には「結構のよい」と言えることであること

- [illegible]

●武蔵大学教授 武内清

日本では高校進学率が七〇％を超えたのは一九六五年であり、その頃より生徒文化への関心が高まった。日本の場合は学歴社会状況を反映して、学校においてアチーブメント（成績）が最も重視され、生徒文化もアチーブメント本位を愛するが、それを拒否するかの二者択一

二、反抗文化としての生徒文化

業績価値の優位な現代社会においては、高いアチーブ

反抗型のひとつの例として非道学校に多い口紅をつけ
る女子高校生の行動と心理を探ってみよう。従つて、非道
学校では女子高校生の二人に一人は口紅をつけたこと
がある。彼女らは、先生に反叛を感じることはしばしば
あり、学校生活は楽しくない。毎日が単調でつまらない。
はやく社会に出て働きたい。休日には友達とシヨッピング
したり、街をぶらついたりする。友人グループのなかで話
題になることは男性のことで、勉強や入試のことが話題
になることはほとんどない。酒、タバコ、オートバイ、デ
ィスコへ入りの騒動もある。『いいなり』と思うのは従順で
まじめな高生ではない、ツッパリ高校生や先生に敵ま
れたら殴りかえすぐらいの気迫をもった高校生である。
将来は専修学校や各種学校へ進みたいと考えている。
口紅には、ちょっとした好奇心以上の意味が込められ
ている。それは従順さやあやふやられることを拒否し、新
たな大人への旅立への希求である。しかしそれは遊び文
化や非行文化の世界であり、必ずしもおとな社会と連続
したのではない。

以上のように反抗文化にコミットする高校生は、勉強
嫌いで学校や教師に反発し、学校をやめたいと考えてい
る。休日は友だちと出かけることが多く、友人とは異性
やあそびのことが話題になる。酒、タバコ、異性交友と

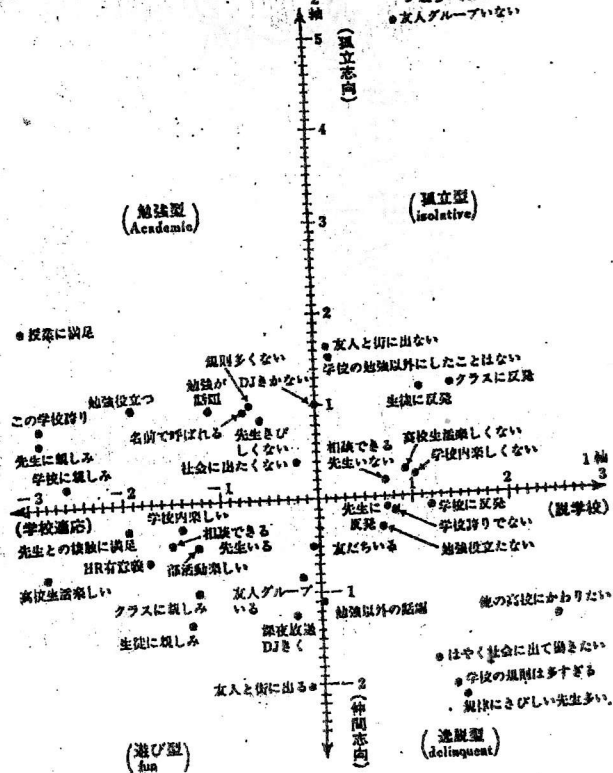
てゐる文化——マンガ、若者向けの雑誌、歌謡曲、コタ、異性、アルビント——にあまり関心を示さないこと、は彼らの脆弱さを感じさせる。

学校が生徒の志向に与える影響も大きい。同じ進学校であっても学校においてタラブ活動やホームルーム活動の奨励されている学校とそうでない学校では、生徒の志向が違つてくる。学校が部活動やホームルーム活動に力を入れていると評価している生徒が六割以上の確立と、学校と、その割合が一割の千葉県立下高校を比較すると、四年生大学進学希望率はともに十割近くで差がないが、

小説を読む、タラシナク音楽をきく、本屋にいづくことが多く、他の生徒のように友人の家に遊びにいったり、歌謡曲、ロックをきくことは少ない。学習参考書や文芸書はたいていさん持っているが、マンガや歌謡曲、ロックのレコードはあまり持っていない。友だちは同じ学校の生徒が多い。友だちとは勉強や入試、社会問題、文学のことが話題になり、異性のことはあまり話題にならない。

彼らは単なるガリ勉タイプではないことは、学校の先生の話や授業内容をおして感動するだけでなく、タラシ、小説、絵画、旅行をおして感動することが一般生徒よりも多いことからわかる。しかし同世代の青年たち

- 楽しい友入いない
- 友人グループいない



清水義弘他「施設類型別にみた高等学校の適正規模に関する社会的研究」『立正大学教育学部紀要』第17巻、1978年より

「習慣」は、能力である。と云ふ人、生體たちは学校より友
グループ活動では方角の異なる力をもつてゐる。
グループ活動を置いていくことがわかる。「生活文化
グループ運動」に価値を置いていることがある。」(註一)
ホームルームではクラス単位の活動が奨励されるが、
生徒の準備した集団はタカでもではなく、クラブ内にあま
りよくない友人グループであらう。これを基盤にしたホー
ムルーの運営をよく考えてみる必要がある。ソシオメトリ
による集團構想の把握、リダーとしての折衝、グルー
再形成、グループ対抗の討論会やスポーツ大会等。

「ホームルームにおいては、生徒相互の人間関係を密にし
るとともに、生徒の自発的な活動を助長することによ
って、高等學校学習指導要領にある『そのためには伝統的習
慣に基づきホームルーンプライマリー教育により、生活文化や生徒活
動の特質に即して指導の工夫がなされねばならない』
(昭和二十九年十一月一日)

Cover A.L.Dukehart Shop (Text Free Press)
② アナトミイ・生理学のO.T. [英訳名外科学解剖学] E.
C. Davis Co., Inc. (一九二二年)
③ 英語
④ 『現代のなかの青年』『現代のユング心理学』『人生と文学文藝』
一九七四年
⑤ 「附録」一九八一年
東京版『都市における学生・高校生組合の発展地図』一九九三年

大学時代
高校時代

【クラブ活動に満足している】

50%

7

クラブに参加
クラブに参加

39.4
44.3

大学時代
高校時代

【両性にもてる】

50%

7

異性1人とも
異性とデートした

39.5
44.3

大学時代
高校時代

【よく読書している】

50%

7

本を読まなかった
本をよく読んだ

34.8
44.3

大学時代の高校生32.7%、高校生のうちよりかえりての高校生1.9%、高校生、1982年より

S 高校の方針は、高校より生徒、先生、学校に於ける眞し
みは高く、順に六三三対五五五、四〇七対三五九、七二
一対三三三、諸問題の参加率も高く、(七四四、七二
五〇〇)、高校生徒を率ひ、(S五三三、T三三三)、通
つての学校生活に誇りを持つようになる。(四四五、
T三三三、四〇七)

姉妹型の高校生徒は、大人からの期待に素直であり、学
校教育方針いかで視野の狭い若い娘にもなり、姉
弟以外のことに関心を向ける前の、広い視野型の高校生
活。

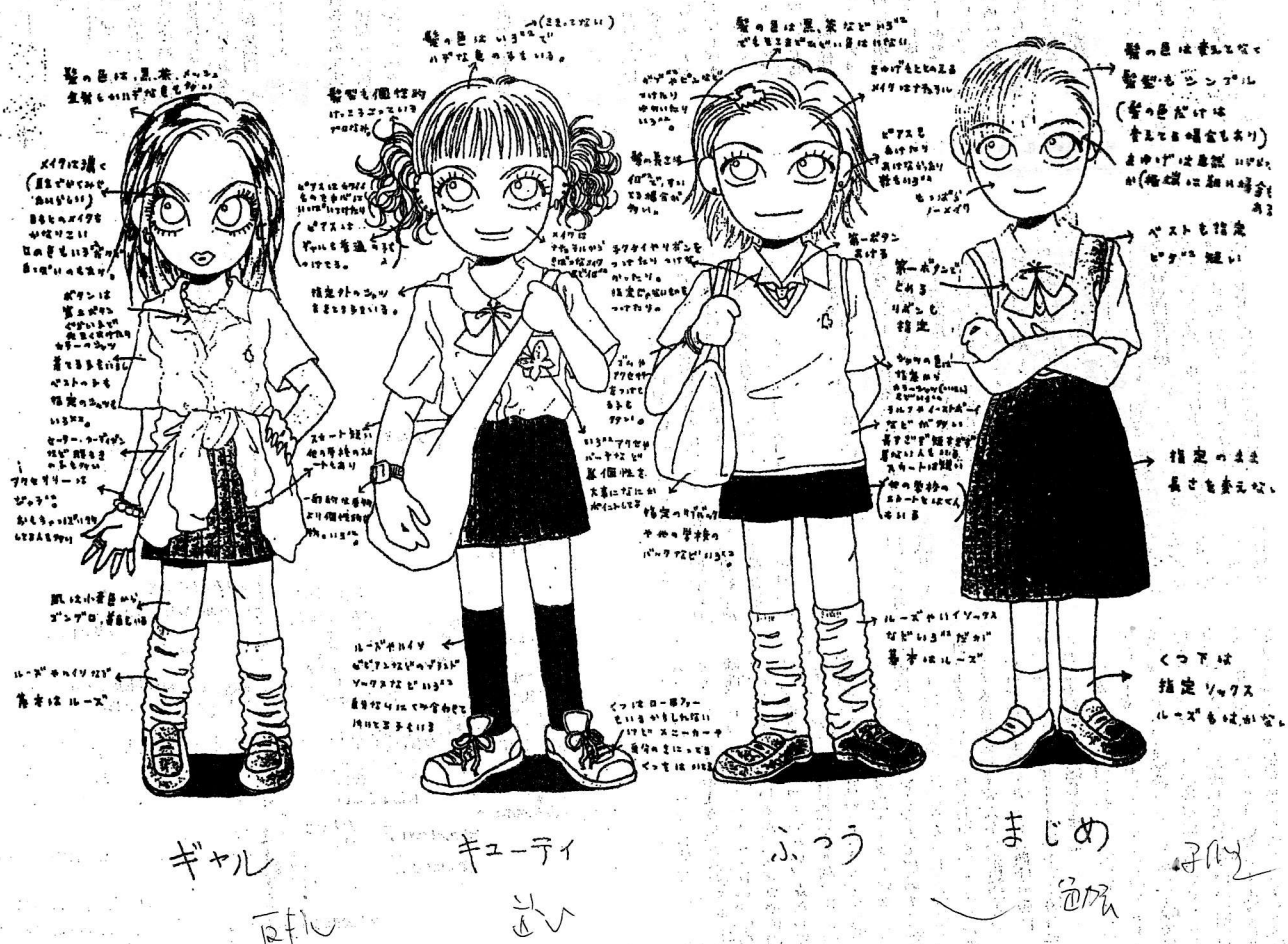
にもなる。

高校生階と大学生階と関連のあることにも注目しておきた。概さうに、高校時代にクラブに参加しなかつたものは大学に入つてもクラブ階級に上げこめず満足感が得く、高校時代に同僚とグッド・フレンドとなひものは大学に入つても興味が自個がもてず、高校時代に疎遠なものがなかつたものは大学に入つても本音で話さない。

このように、大学に入つて急に始まつたものは関係が薄からいつて浮き、手置れたることも多ある。勉強のみに沈滞するガリ勉型の青年に對し、さまたげな活動を実施するハイムルームやクラブ活動の指導が大切になつてゐる。

四、下位文化としての生徒文化

アメリカの青年には勉強と遊ばふと生徒活動（クラブ・ハイムルーム）や遊び志向を尊重する文化風土がある。野に對して、日本とは勉強重視が著しく、勉強以外分野に對しては生徒活動は十分に育てない。そのかわりインフォーマルな社交活動が多く存在する。それはクラブやハイムルーム活動を基盤として成立した目的意識のある生徒階ではなく、偶然クラスや席を同じくして成立した仲とグループである。そのグループに



教育原論 第11回 リアクション(6月30日) 子ども文化・生徒文化について
(テキスト 第7章 5節 p101-102)

番号

氏名

1 前回のリアクションを読んでの感想

様々な意見があり参考になった。

2 子どもが大人や教師に反発を感じたり、反抗的になる時期は、一般的にいつですか。

中学校1年 ~ 3年生くらい。

3 あなたにそのような反抗期はありましたか。

① あった 2 どちらともいえない 3 なかった

4 子どもが大人や教師に反発を感じたり、反抗的になる理由をあげなさい。

「自立心の芽生え」や「自立心の獲得」だと考える。
精神が不安定の時に親や教師に反抗的になり、
暴言などを吐くと思う。

5 現代の大人と子どもの意識や価値観の違いは、どのようなところに現われていると思いますか。

大人は子どもを規制したがり、子どもは自由に行動したがる。大人は子どもの価値観を否定したり、大人の価値観に洗脳しようとするところに現われていると思う。

6 高校生の生徒文化(行動様式)を、4つに分ける見方がありましたが(プリント1983年参照)、これは、現代にも通じるものがありますか。それとも全く別ですか。できれば、高校時代を思い出し、典型的な生徒像をイラストで描いてください。



7 現代の大学教師と学生との間には、どのような考え方や価値観の違いがあると思いますか。

違いはあまりないと思う。

高校や義務教育よりも大学教師は博識なため、大学生との価値観のずれが少ないと思う。

教育原論 第11回 リアクション(6月30日) 子ども文化・生徒文化について

(テキスト 第7章 5節 p101-102)

番号 氏名

1 前回のリアクションを読んだ感想

みんないいねいを書いていて、すごいと思います!

2 子どもが大人や教師に反発を感じたり、反抗的になる時期は、一般的にいつですか。

小学校高学年 ~ 中学校時代

私は中学校から高校2年生まで?

3 あなたにそのような反抗期はありましたか。

1 あった 2 どちらともいえない 3 なかった

自尊心とは
自分の人格を大切に
品格を保とうと
する気持ち、プライド

4 子どもが大人や教師に反発を感じたり、反抗的になる理由をあげなさい。

大人や教師から低い評価が与えられ、心を傷つけられた子どもは、傷ついた自尊心を守るべく、自分達を傷つけた価値を否定し、傷ついたもの同士で連帯し反抗する。
自分の自尊心の回復をはかる。

5 現代の大人と子どもの意識や価値観の違いは、どのようなところに現われていると思いますか。

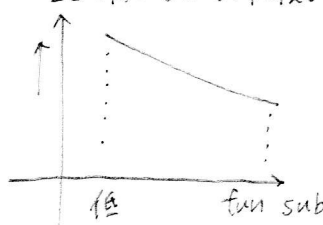
今はすぐスマートフォンやインターネットなどが普及して、私たちの親が苦勞して手に入れたものも、私たちは簡単に手に入れたりできるからそういうところから価値観のちがいがはじいていると思う。

6 高校生の生徒文化(行動様式)を、4つに分ける見方がありましたが(プリント1983年参照)、これは、現代にも通じるものがありますか。それとも全く別ですか。できれば、高校時代を思い出し、典型的な生徒像をイラストで描いてください。



7 現代の大学教師と学生との間には、どのような考え方や価値観の違いがあると思いますか。→ 先生と生徒の関係が敵対化しつつあると思う。生徒はもっと先生を尊敬する気持ちが減っているのではないかと心配している。

強型 academic
適応型
脱学校
従脱型
反抗型



子ども → 農業社会 → 工業社会 → 消費社会
大人 → 第1次 第2次 第3次
社会 → 伝統 自己志向 他者志向

学校生活

孤独志向

勉強型

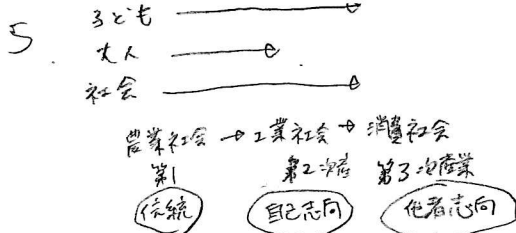
孤立型

学校志向

遊心型

逸脱型

仲間志向



教育原論 第11回 リアクション(6月30日) 子ども文化・生徒文化について
(テキスト 第7章5節 p101-102)

番号 氏名

1 前回のリアクションを読んだ感想

色々な意見があり良かったです。

2 子どもが大人や教師に反発を感じたり、反抗的になる時期は、一般的にいつですか。

小学校高学年や中学生

3 あなたにそのような反抗期はありましたか。

① あった ② どちらともいえない ③ なかった

4 子どもが大人や教師に反発を感じたり、反抗的になる理由をあげなさい。

- ① 自由を求め子供：大人や教師の指導に対して、自分たちで自由な行動のしかたを主張するため。
 - ② 子ども反抗期：自立へのステップになる。
 - ③ 反動形成
 - ④ 階層間葛藤
- 5 現代の大人と子どもの意識や価値観の違いは、どのようなところに現われていると思いますか。

日常会話で使う言葉。

6 高校生の生徒文化(行動様式)を、4つに分ける見方がありましたが(プリント1983年参照)、これは、現代にも通じるものがありますか。それとも全く別ですか。できれば、高校時代を思い出し、典型的な生徒像をイラストで描いてください。

女

- ・黒か茶色の髪
- ・リボンがゆるめ
- ・スカートがゴウエ
- ・ジャージをはいてる時もある。

男

- ・黒髪
- ・ネクタイはきち、としめない。
- ・基本セーターか、Tシャツで過ごす。
- ・夏はズボンとまきる。



7 現代の大学教師と学生との間には、どのような考え方や価値観の違いがあると思いますか。

先生・オスス×が自分に合っていない時。